



岩見編集長の
炉辺談話
◆ 第二回

同世代の俊英を招いてGISを語り合う「炉辺談話」。第2回のゲストは、東京大学の清水英範先生です。清水先生は、都市・地域計画の分野に幅広くGISを応用し、クリエイティブな研究を展開されています。最近では、GISによる江戸の都市景観再現がマスメディアに取り上げられ、注目を集めました。とにかく、その真摯な研究姿勢と実直な人柄に惹かれ、ご登場をお願いしました。

今回の対談場所は、清水先生が“人知れず”通う都内の小さなおでん屋さん。皆さんが知らない先生の一面が覗けるかもしれませんよ。



GISで自分探しの旅に出よう

ゲスト／東京大学教授 清水英範さん

地理学への回帰

岩見 先生は、そもそもどうして土木の分野を専攻されたんですか？

清水 私はもともと地理好きなんです。小さい頃から地図ばかり眺めて、パッチャル旅行を楽しんでいました。大学に入って、教養学部の時代に実際にいろいろな場所を旅行するうち、街を見るのが好きになり、やがて見ているだけでなく変えてみたいと考えるようになったわけです。当時は地理という現象を調べるだけというイメージがあって、それより実際にモノを作りたいと思ったんですね。

岩見 でも、先生の場合、いわゆる土木の専門家というイメージがありません。狭い枠にとらわれない研究活動のせいでしょうかね。

清水 実は、10年くらい前から、もう1度地理好きに戻ろうと考えてきたんです。それまでは、私も高速道路の計画とか、その経済効果の予測とかにかかわる仕事をやっていたこともあるんですが、





富士山を望む街並の景観（現在の日本橋三越前から。写真は2003年秋のもの）



土木の世界はどうも作ることを自己目的化してしまっているところがあって、それに対して違和感があった。もちろん、マスコミがよくやる短絡的な土木批判とは次元が違うんですよ。それでも、特定の土木事業ありきで、その費用対効果だけで議論しようとする方式には限界があると素直に思いました。それで、もう1回地域をじっくり見るところから始めようと思ったんです。東京という都市の個性は何か、問題点は何かをじっくり見て、何をすべきかを根本から考え直そうと。地理学への回帰、というべきかな。GISの意義もこういうところにしっかり位置づけたいと思ったんです。

江戸の景観と富士山

岩見 なるほど。それ以降、GISを利用して国土や都市の歴史の変遷などを明らかにする研究に力を入れてこられたんですね。

それにしても、先生の研究室で進められる、江戸の都市景観をGISで再現

するプロジェクトは面白いですね。私たちが不揃いな建物で埋め尽くしてしまった東京という都市の原型が見えてくるような気がします。新聞などでもずいぶん紹介されていました。もっとも、どちらかというと「CGで広重の描いた景観を再現」みたいな取り上げ方でしたけど。

清水 そうなんです。私たちは、視点を変えて江戸の景観を再現できるシステムを作ろうとしているんですが、まずは注目してもらうために歌川（安藤）広重が名所江戸百景で描いた景観を再現してみたわけです。注目はしてもらったんですが、広重の専門家か何かのように思われてしまって（笑）。

そもそも、「CGでしょ」って言われるんですけど、GISなんですよ。「天保御江戸絵図」という江戸の絵図を幾何補正し

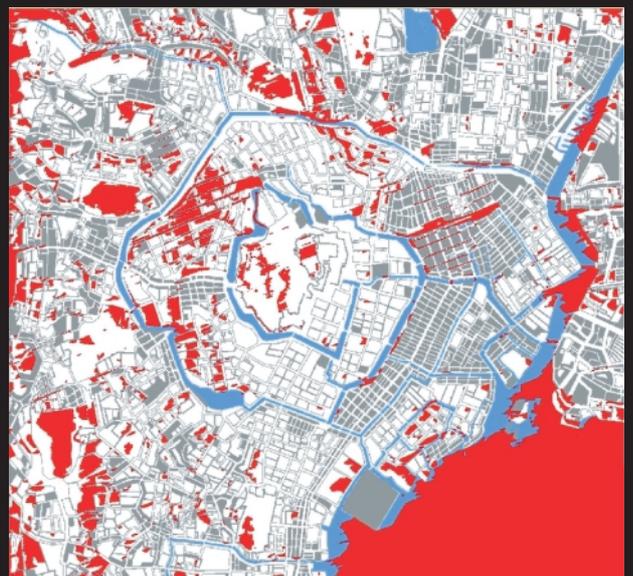
て、そこに明治時代の地形図から抽出した地形データを重ねているんです。そうでなければ、正確な景観は再現できない。たんに江戸情緒溢れる景観をCGで描くだけならいくらでもやられていますから。

岩見 GISで景観を再現してみて、何が見えてきましたか？

清水 広重も北斎も描いていない景観がたくさんあったということ。いわゆる名所の景観だけでなく、市民の生活景観の中に富士山や江戸湾があった、それが普段の景観だった、ということですね。

岩見 江戸時代に地上から富士山が見えた地点を示した地図もありましたね。あれは驚いた。江戸ではいたるところから富士山が見えていたんだなあ、と。

清水 以前にも、地形だけで富士山が見



江戸の富士山可視マップ：富士山の新7合目が見えた場所を赤く表示している



える場所を割り出した人はいたんですが、私たちは建物も入れています。それでもこれだけのところで富士山が見えたんです。

「汐見」と「富士見」

岩見 先生は以前、一方に富士山、他方に海への雄大な眺望を持つことが、徳川家康をして江戸に居城を構えさせた理由だったという、歴史地理学者の故・足利健亮先生の説を紹介されていましたね。

清水 足利先生は、家康ほどの大大名が秀吉から関八州への領地替えを命令されて仕方なく江戸を選んだのだとは思えない、そこには家康なりの思想があったはずだと考えた。そして、「死を見」(＝汐見)で育ってきたおのれが、「不死身」(＝富士見)を目指す場所として江戸を位置づけたのではないかと想像したんですね。関八州でも、鎌倉は高台に上らないと富士山は見えないし、狭い。小田原からは富士山はまったく見えません。

岩見 駿河町から正面に富士山を望み、芝愛宕山から江戸湾を見渡す再現図を見ていると、足利説がますます真実味を帯びてきますね。天下を取ろうとする家康が、江戸の景観に自分の思想の具現化を見たに違いないという、その想像力が素晴らしい。家康は、おそらくその通りに考えたでしょうね。

清水 ええ、考えたでしょう。いや、そう思いたいですね。江戸に移る理由を測

りかねていた腹心たちに、大城下町建設の壮大なロマンを家康が語ったのだとすれば魅力的ですね。何か、家康を強引にヒーローにするようで研究者の思考としてはよろしくないのですが(笑)。

恵まれた地形を持つ東京

岩見 そうした歴史から振り返ってみると、私たちがあまり意識することなく生活しているこの東京という都市は、実は恵まれた景観の素質を持っているとも言えるわけですね。

清水 起伏に富んだ、景観形成にとって実に恵まれた地形の上にある大都会でしょう。人間が、親から授かった身体や倫理観をバックボーンにして成長していくように、都市も天賦の大地、そこから授

かった原地形、原景観を生かして成長していくべきだと思います。

岩見 にもかかわらず、基本的に景観について考慮せずに都市づくりを進めてきてしまった…。

清水 景観を考えていないとよく言うけれど、たとえば銀杏並木で有名な絵画館前や東京駅丸の内口から皇居への通りなどは、早くから電線も地中化されて、街路の景観が考慮されてきたんです。しかし、それが東京ならではの個性なのかと言うと、そうは言えない。固有の地形や首都のランドマークを生かしたタウン形成は、やはりなされてこなかった。

本当にエネルギーを使って、ライフワークとして、そのために死んでもいいというくらいの気概で仕事をする人が出ないまま、その場しのぎの取り組みを積み



文京シビックセンターの展望ラウンジから東京の景観を望む



重ねてきたということです。東京にある数多くの富士見坂の眺望をすべて失ったことなどは、東京の景観計画の失敗の最たるものです。

GISで地域のアイデンティティを探す

岩見 景観形成は積み重ねですからね。これから東京の景観を再生させるのは容易ではない。

清水 まず、東京のアイデンティティは何か、ということをもう一度見つけ直すべきです。パリやロンドンやニューヨークや上海に真似できないものは何なのか。

たとえば、今挙げたような主要国の首都であるスーパーシティで、海が見える街はあるか。パリ、ロンドンは見えない。ニューヨークも街路からは見えない、とか。GISにいろんなデータを入れて見れば、自分の街のアイデンティティ探し、自分探しの旅を始められる。そこから、都市の個性を伸ばすには何が必要かを掴むわけです。

岩見 GISによる自分探しの旅、いいですね。東京のような大都市だけでなく、むしろ市町村などで、住民同士がGISを使いながら地域のあり方について議論し合うようなムーブメントが広がるといい。

清水 さらに言えば、小中学生がわが街の個性をいくつ言えるか、それを教育するのが初等・中等教育の社会科でしょう。同じ人口規模や産業構成を持ってい

る全国の街を調べ、地図で見ながら違いを探してみる。川があるのがわが街の特徴だと分かったら、それを大事にしようと考えるようになる。

自分たちの地域の良さ、悪さを比べながら、みんなで議論していく。これこそ地理の原点ですよ。そのためのツールがGISなんです。

GISはタイムマシン

岩見 GISを活用することの面白さをもっと広めていくことが必要ですね。

清水 その通り。GISというのは、たんに決まったものを表示したり、地形図の上にオーバーレイしたりするものじゃなくて、無限のロマンと可能性を持ったツールだということを知ってほしい。

岩見 時空間を自由に飛び回ることができるツールですよ。地理的に遠く離れた世界のことも、時間的過去や未来の世界のことも、想像力のおもむくままに眼前に構成できる。

清水 そうそう。本当のタイムマシンは作れないけれど、GISを通じたタイムマシンならできるんだ。

岩見 タイムマシンに乗るようにGISを使いこなしたいですね。

清水 GISとしてのタイムマシンという概念を作らなければ。

岩見 それは興味深いコンセプトだなあ。先生への宿題にさせてもらいます(笑)。



【プロフィール】

しみず えいはん

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻教授。専門は、空間情報学、地域計画。

昭和34年、愛知県生まれ。昭和57年、東京大学工学部土木工学科卒。東京大学助手、講師、岐阜大学助教授、東京大学助教授などを経て、平成10年より現職。

家族は、妻と1男。趣味は、気さくな酒場で気さくな仲間と交わす酒。研究や仕事のアイデアはすべてここから生まれる(ご本人談)。

研究室URL：<http://planner.t.u-tokyo.ac.jp/>

撮影／大隅孝之